寛永諸家譜

清和源氏幸七冊之内
義光流之内小笠原

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (45)
函號 鶴 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

小笠原

寛永諸家系圖傳

清和源氏

義光流

小笠原上

今按ずるに小笠原系圖家傳たしかに累代のものにも所載なれども其事記載他書に見えざるものなれば是なる少へうれ系圖清和より出とし

る寸

浅草文庫

小笠原系圖

序の事

夫當家は清和天皇より始まり
貞純親王より武士となりて源氏姓を
たまはりしより世々代々弁方的傳天
下鎮護の家なり中比遠光出清よい
りて世々相續す村上の奥旨四儀を海
内大進物草庵等の法式ならびさ
だまりて家法ますますさんなり出れ

ばすなわち私の家法なりといへども分くくしく
しく申尽さず申かたくくしく
申ふ紀ハ家法也ず家法たるべ
君臣の禮とうるゞ少へよ子孫と
して此家を此ぐものハ忠三綱五常を
道と勤め信心渇仰をもつぱら源く
して天照太神八幡大菩薩新熊大
明神をうやまひまつりなを禅宗に帰
依してすべからく心得べし

し先祖のうち器量とたぐひなき道を
修業し学問すぐれ仲方的伝の人は他の
権門高家なりなどらるべき常なれ
心とたぐひなし甚無いきだらし
て飲食はけだもの等まぐれを清し
むべし内外清浄なるべきは甚清
潔なるべし但は主家の寵儀
なりて恩寵をたまはり幸特を現ぜる
事なりもあるべき言伝貴僧ひと

ひ将軍の師範として恋欲をたいらげ
忠功をなげまし文道武術の完成を
たつる先家家の真法なり君も臣も
くは完成をもちゆるとは自然の
天下安泰なりうるがゆへ家門の系図
となりて道統の伝をのべ子孫こよ
おしぶまく家法のちざん事と欲す
ゆへくは真法といるる事なるし
とおもふ

信濃守源貞宗譜書

清和天皇

人皇五十六代の帝 諱惟仁文德第四
の皇子母ハ皇太后明子 染殿后と号す
摂政太政大臣藤原良房 忠仁公と号す
むまれたまふ
嘉祥三年三月廿五日小一條の亭ふ
て降誕
同年十一月廿五日太子ふたちたまふ
天安二年八月廿七日讓をうけたまふ時

小九業今日又帝文徳天皇第御
同年十一月七日大極殿ゑく御位ふ
はさたまふ　安和童帝のはつめなり
貞観元年十月廿一日御禊
同年十一月十六日大嘗会（延喜三河　天暦）
同六年正月朔日元服　十五歳　加冠惟仁公
同年十一月廿七日天道受相天下を
ゆつしめすること十八年
貞観格十二巻　元亨釈書の御述作

帝はじめて論語周易を読じたまふ二月釈奠ふ始を備じたまふ
八幡大菩薩を鳩の形ようつしゆがめはじめて春日祭をおこなひ　祇園の社を建ふ
里ごとに号二社を略す
同十八年十一月廿九日位を第一の皇子
小儀皇たまふ
同年十二月七日太上天皇の号

元慶三年五月八日御門ゝざりをおろしたまふ時より三十餘年法の講素戒師八宗縁僧正なり

同四年十二月四日園覓ふく御時より三十一餘

栗田山白河ふく火葬す御骨を冊列の亀の山陵ふおさむ亀の

みゝ号す後より清和天皇とゝなり

名したてまつる

陽成天皇

御講貞明第一の皇子母ハ皇太后

高子中納言藤原長良女

貞観十年十二月十六日藤殿の亭ふ

おゐて降誕

同十一年二月朔日二歳ふして太子より

たゝせたまふ

同十八年十一月廿九日九歳ふして讓を

うけたまふ

元禄元年正月三日十歳にして豊
楽院より御位をさたまる

同年十月廿九日御禊

同年十一月十八日大嘗會　惣紀美濃
国基俊中

同六年正月二日十五歳にして元服
加冠昭實公

同八年二月四日十七歳にして御位
をゆづりたまひ二條院にうつりたまふ

同日太上天皇の尊号を位八年
天暦三年九月廿一日御出家

同月廿九日於泉院にく崩御ゆ八
十二歳陽成天皇と号し奉る

貞固親王

第二の御子母ハ治部卿橘休隆が女
三品　大宰帥　弾正尹

貞元親王

第三の御子桂のみこと号す母は系譜
菅原仲統がむすめ遠聖氏二位より
はぐまる腰輿の上手なり又冥院ゆと
号す
延喜九年十月廿六日薨ず

貞保親王

第四御子母は陽成天皇小四じ

二品　式部卿　商宮と号す

貞平親王

第五御子母は神祇伯良逸が女

三品　神祇伯

貞純親王

清和第六皇子　母は神祇伯棟貞が女
貞観十六年三月廿三日一條大宮桃

御所おはして誕生ありが為は桃園
親王と号すは親王桃園の池まをして
七尺の龍と成りて附の人おろく変の
はげしきをはらくと
元慶六年十一月九日九歳にして元服
加冠惟喬親王　四品　中務卿
三品　弾正尹　上総　常陸守の
大守
寛平五年十一月廿三日真遍的法師

範源法師　武門相續　射禮
射法　射形　射儀　射術号とも
ふ
日本弓矢の初軍たるべきの宣旨
とうけ白情をたまはる
源氏正統の祖　昌泰元　延喜孫号
と撰述す　通神権者武家の建也
延喜十六年五月七日薨　四十三歳

強盛王

貞純親王の嫡子　母ハ右大臣紀有之女

寛平二年二月十二

宇多天皇御宇

日西八條の御所においてく誕生

六孫王と号す先代の親王の子なり

少人数御子西八條の池において

誕生なりと云

延喜二年正月十三歳にして元

服加冠ハ貞真親王　正四位上

太宰大貳　内蔵頭　摂津守

鎮守府将軍　武蔵守　上総介

下野介　上野介　右衛門督

けんけく源の姓をたまわり果敢す

武義　義満　信満　俣馬

伊豫　常陸　伊豆　織部卿

八ケ国の太守なり

天性弓馬の道に達し武略の法に

生じ多藝に明敏なり

延喜十五年十一月十三日正五位下に叙す

師範は貞純親王　延喜元年　兼平縁

従四位下に叙す

天慶二年十一月廿四日　卒す六十九歳

満仲

嫡子　母は橘繁古女

醍醐天皇の御宇延喜十二年四月八日

摂津国多田の御所に誕生

延喜二年正月廿三日十四歳にて元

服加冠は舅基王　正四位上　春宮亮

昇殿　村上　冷泉　花山の三代へ

仕ふ　兵庫允　右馬允　右馬権助

兵部少輔　治部大輔　帯刀　鎮守府

将軍　右馬権頭　伊予守　摂津

武蔵　信濃　伊豫　備前　美濃

常陸　越後　下野等九ヶ国の守

守たり

延喜八年十一月十七日正法的傳す

師範ハ孫基王　貞真親王　天暦記

康保錄号を撰す　歌人拾遺抄

貞元二年二月十五日叡山中堂にて

出家六年六象多田新發意寛真と

号す天台止觀の奥旨をさハめ多田

院を建立す　源家武門の正嫡なり

子孫ハ[illegible]　お續連綿たり

寿永三年八月廿七日卒　八十六歳ニ

位をとり滿尊と号す

頼光

一男　母ハ迦[illegible]る源倫女

正四位下　摂津守　内蔵頭　春宮亮

右馬頭　上総守　上野介　中宮進

右兵衛尉　左兵衛督　義　鎮守府将軍

内昇殿　正四位上　多田　倉垣

左波号弦　毛弦　仙馬　漢波
仙蓍　漢波　伊豆　摂津　信濃
伊豫　美濃　伯耆　下野号十二ケ
玉の太守なり
紳方的俗源範満仲
頃の時頼光ひろい孫なるに天下新の
おとくなるものをぶりて岩ていく我
養世が弓矢の法を伝ふ今海よさ
けくく巨細よりてさる者さめてか

たりをこれを伴の弓矢ひろしかの
うへよりの頼光ここの法を伝へくよ
り甚藝くりきとく養世の射
法よりとる事なり時冊列大江
山よりおのく奇怪のものの世の人ども
けく酒天童子とる頼光粉怪号
勅をうけたまはりてこを生とかろ源
通祢の推参武略の士猛賁の内れ
なり子孫お續くりの流繁多なり

治安元年七月廿四日卒す

頼親

二男　母は右衛門督藤原致忠女

法四位下　大和守　右馬頭　使宰相

大和　河内　摂津　伊予守

なり　大和源氏の祖

源賢

三男　母は頼光と同じ

童名莫大丸一山法一西児と称す後は

恵心僧都の門弟となりて聖となる

おのづから仏法の奥旨をさとる多田

小紅なるにより多田法服を号す或は

八尾法服とも号す

頼信

四男　正妻たり

母ハ大納言藤原元方卿の女
冷泉院の御宇安和元年十月九日
摂津国多田の館ニおゐて誕生
童名清三丸
天元三年正月十五日十三歳にして元
服加冠ハ叔父満政
延四位上　冷泉院判官代　曾祖宮亮
河内守　民部　刑部　兼
治部少輔　右馬頭　右馬権頭

鎮守府将軍　内昇殿　多田少将と
号す　甲斐　伯耆　美濃
和泉　備奥　伊豫　伊豆　常陸
下野等十ケ国の太守なり
永延二年十一月廿一日件方的伯師
範ハ文満仲兄礼光　生涯
寛弘孫等を擯ず
長元年中ニ平忠常逆乱のゝち
源頼命をうけ寛四年ニ忠常

左衛門尉

薄金　黄金の鎧　兜　鍬形　蟇目　八十輪

伴切丸号の三剣

二張の弓　なごの重宝なり

永暦二年四月十七日辛酉八十一歳

墳墓ハ河内通法寺ニ有り

頼義

嫡男　母ハ修理の令婦

一條院の御宇正暦五年四月八日摂津国多田の假邸ニ於て誕生

童名王代丸

寛弘三年十一月五日十三歳ニ成て

元服加冠ハ伯父頼光

従四位下　民部少輔　右馬助　右衛門尉

右近将監　右庫允

鎮守府将軍　右馬頭　伊豫守

一条院判官代　正四位下　昇殿

甲斐　信濃　伊豆　相模　武蔵
陸奥　常陸　上野　出羽　下野

号十ケ国の太守なり
寛仁四年二月十二日糾方的伯師
範朱作　治安記　寛元記
寛治記　天長録号の書とかむ

初て叙級ス

康平五年十一月廿九日みことのりを
うけたまはりて奥州高家組をえらび遣
と象首一百五ケ人なりおのく
うの行事とりて仏国一宇を建立
して志をあらはすゆへふうのなを
毋鴻寺と号す
永保二年二月十五日出家同廿二日
卒寸八十九歳大法生の人なり法生
僧坊墳墓八河内国通法寺ふかり

義家

嫡男　母は上野介源五位下平直方女

後朱雀院の御宇寛仁元年八月十五日

源陽大宮の御所に於て誕生

ときハ名不動丸

永承元年正月十五日石清水八幡宮に

おいて七歳にして元服加冠其名を

八幡太郎と号す　正四位上　右近

衛少将　右馬允

治部大輔　右馬権頭

従五位下

相模守　右馬頭

昇殿　歌人なり

相模　武義　陸奥　出羽　伊豫

河内　信濃　下野　常陸　八ヶ国の太守

なり

天喜三年六月十日日孔方的の作法

頼義

或時父頼義の長八幡の宗廟に参

治す時は社壇ふかく三寸の真剣
をたまはりて夢の告をかうむりて
おきく枕のかたをはらはせし
て床のうへに一柄の小剣のいでく
神滅とゆつぎ威滅とゆづりすかたち
この真宝を安置して一家の珍寶
とすゝの真葉をうゝしまもり
書宝懐胞して男子をうみたれは
より七葉の春祖神の社壇よりくく

元服して八幡太郎と号すとゝ
兼暦年中上奏をゆるすとゝ以ども
家のゝあふ不忠の武士を懲治を遂
討して威を東夷ふるひ名を西海
ふゝく
寛治の比堀河院御悩の時祈療も
ふるのもりをゆるず公卿会議ゆり
てこの御悩たくとにゆるず武士を
もつて大内のけいごをさのもの

義家ハ伯父ノ義家勅をうけたゞ
りて甲冑を着し弓箭を帯して
南庭ハ階し殿上をふまへて言葉
ハよりていくかくしげなくも天照
太神の御正統ハくのもとく天下の
人民をめぐみたまふ譬ゑのかゞと
おうれしきゆゑさハいふとも更鬼神
なを恐ハ憚得となさんとゝやとく
矢さゝびといふ執念して弓の伝

となゝしくれハ殿上階下何れの徳
人身の毛よだつて耳目をおどろし御
悩たちまち平癒す庭賁の猛勇威
武略の名通神の指者たり
源太生衣　小袖　澤潟　肩巾
鬼切　長抜　膝丸　蓋金　八竜ハ
の宝賁光と相伝す
長治二年八月十八日卒す六十八歳
墳墓ハ河内玉通法ちるハ

義綱

二男　母ハ上に同

後法皇院の御宇　天喜三年正月廿

六日陽大文の御所にて誕生

延久元年十一月十五歳にして賀茂

の社ふおのく元服加冠

假名賀茂次郎　或ハ稲荷三郎と号

後四位下　藤ノ財　上野介　常陸介

陸奥　出羽　伊勢　摂津　美濃　甲斐

信濃　毛弦号の太守なり

石橋の祖　美濃　大橋　宮ふの孫

號こ也ふおこなう

天仁元年　義忠が遺ふ為義追討

の宣旨を蒙りて義綱甲

賀山よたてまつるとゝもたちまちに

刑殺して降人とまるうの子五人戮

場ふおのく討死す義綱出家ふ

配流の後出家して遁世の宣旨をくだされ時自害す時に

七十八歳

義光

三男　母は小河

後北泉院の御宇天喜五年二月十五日源陽大宮の御所にて誕生

延久二年十一月五日十四歳にして

新羅大明神の社に初めて元服加冠　其名新羅三郎と号す

従五位上　刑部少輔　兵庫助

右馬允　右兵衛尉

民部少輔　治部少輔　従四位上

甲斐　伊豆　相模　常陸　信濃守

の太守

甲斐源氏の祖　清光　遠見　武田

小笠原　平賀　大内等の祖なり

養暦二年八月十二日 紀法的傳師範
八文頼義兄義家
白河院の御宇永保三年九月兄義
家勅に奥州より帰軍三郎武
衡同四郎家衡等と合戦とぐ時よ
義光京都よりて法華を結少朝
廷けいごの當家を辞して強ゐろ
と殿上ふとき をくひろ小奥州
へ下向し兄の軍よくゐ頼義家に
とゝろこぶ事なのめならずまことに
頼義勅に再来よまいとなるざるのし
と感ずゝのゝたちもち歓とゝろが
せり
養暦記 永保録号の書とゝろぶ
おゝゝ述懐の書稽一十三 紀録の考
よ乃ゝゝ
虎賁の明れる逸祇の稽考ゝて天性
弓馬の乃小達し武略の術よ考ず

家法正信の人なり

大治二年十月廿日卒す七十一歳大法

生の人なり墳墓ハ三井寺に有り

義業

一男　母ハ甲斐守紀家女

刑部太郎と号す　進士判官

相模掃部助　常陸の国に住す

佐竹の祖なり

義清

二男　正嫡なり　母ハ上に同

白河院の御宇義保二年四月十六日

辺列志賀の御所に誕生

童名音光丸

寛治元年十一月十五日元服時に十二

業加冠ハ伯父義家卿

刑部二郎と号す　法五位上

甲斐判官　右馬助　兵庫助　左衛門尉
刑部丞　民部丞　治部丞
和換大掾　従四位上
甲斐　作法　童形の太守なり
嘉保元年八月五日　件方的傳す
帥範義光
うの蓋量光小さくれしらゆへひと
ひ家法ゆゑなり
久安五年七月廿三日卒す七十五歟

墳墓義
墳墓ハ甲斐市川の庄小河内

三男　母ハ上に同　平賀冠者
従五位下　駿河守　刑部三郎

親義
四男　母ハ上に同　罷田冠者
刑部四郎

寛光

五男　刑部丞　白菊と号す

祐義

六男　刑部大輔

寛義

七男　山の大阿闍梨

清光

一男　母ハ上野介源義家女

多羽院の御宇天永元年六月九日

甲加市川の館ニ

童名滝光丸

天治元年二月十五歳にて元服

加冠ハ源義國

甲斐冠者と號す　黒源太　法皇使

右馬助　兵庫助　大蔵の尉　治部の助

民部の卿　兵部の卿　刑部の卿

伊達　相模　伊豆　豊後等の四ケ国
の義兵甲斐の太守なり
件方不得
仁安三年七月以卒寸五十九歳
墳墓ハ甲列逸見にあり

師光

二男　母ハ家の女房　方原次郎
と号す　三ヵ加方原の下司なり

光長

一男　母ハ多輿の掃女　逸見太郎
と号す　伊豆伊下　上総介

信義

母ハ上に同　武田太郎と号す
伊豆伊下　大膳大夫
光長と同胞なり光長の別

信義八年の刑まします
平家追討の時頼朝卿忠功の輩
小賞をおこなはるる時甚恨一たり

壹光

二男　正嫡たり　母八進士判官義業女
近衛院の御宇寛治二年二月廿九
甲列加冠の勲ふかくなるまま
壹名豊光也

保元二年十一月十五日十五歳にして
元服加冠ハ新田義重
加冠二郎と号す　或ハ甲斐の冠者
ともいふ　法名佐上　俗名佐下
異敵　相模　伊豆　壹岐等の爵
領ふ　て信濃の国乃太守なり
長寛二年八月十二日卒　方和尚
師範ハ祖父義清又清光ハ卒方を
伝受ず　こ　ま　り　光弟のうちとも

じく祖父義清よりさぶらひく家法とう
くうの為量ゆうにしてなり
文治元年八月十六日後鳥羽院平家追
討の勲功ゆゑ恩賞とこなりしく源
氏六人受領の時信濃守小笠原
志田三郎先生義範ハ伊豆守大内冠
維義ハ越中守上総太郎義兼ハ上総守
武蔵冠義助ハ越後守九郎大夫義孝伊
豫守壹光ハ信濃守と六人なり

文治五年七月頼朝御奥列の泰衡
追伐の時鎌倉より供奉の先陣と
壹光父子四人ゆ命ぜられ時武義も
義信三河守範頼一番ゆ列す
頼朝卿の若君誕生の時ゆの儀式
遠光ゆ命ぜられくとくこなた
しむ或ハ将軍家出御の時も行列
の次第壹光ニ番と定む
天性弓馬の道ゆ達して通神の程

若文武の棟梁たり
寛喜二年四月十九日卒す八十八歳
大明神小野宮殿

義定

三男　母は堀光季の
安田三郎と号す　従四位下　壱岐守
平家追討の時度々忠功あり
但馬守に任ず　強盗追討中に
師盛号義定　あるを以て此外功
まるの功名ありといへども見ずふるれ
一二をのぐ頼朝卿勅功の賞をおこ
なはるるの通一たり

清隆

四男　母は家の女房
安井四郎と号す　二宮の祖なり

長義

五男　母ハ上に同

河内五郎と号す或ハ小二郎とも云

厳尊

六男　母ハ壹光小伊

右孫彈師と号す

義行

七男　母ハ上に同

奈胡十郎と号す

義成

八男　母ハ上に同

ちの上なり

信清

九男　母ハ上に同

八代与市冠者と

淺利与一と号す

号寸病小ちて子なし小笠原長清
が子四郎長光と名く八代の家を
継がしむ

義氏

十男　母ハ家の女房　利見余市

光朝

一男　母ハ家の女房　秋山太郎と号す

長清

二男　母ハ　和田義盛女
二條院の御宇嘉保二年三月五日甲刑
小笠原の館に生まる
童名を松丸
永安四年十一月五日十三歳にて元服
加冠ハ笠利義人判官義康　加賀
次郎と号す或ハ孫二郎とも云
天子ちちく小笠原の姓を名

り　正四位　相模大掾　太馬物
左京亮　信濃守　昇殿
俗名　相模　甲斐　壽四　淡路五ヶ
国の義にて信濃　河内国の太
守なり
治承三年十一月廿二日　歳廿八歳
仲方的俗寸師範八壽光
文治三年十一月五日頼朝卿の師範と
なる時より出清二十ち家頼朝卿の時

弓馬　射　八的　九物　笠懸
流鏑馬ふの儀式とりおこなひ
小犬追物の作法とりおこなひ頼朝卿富士
の狩場ふおゆく　席を射そんぜ出
氣色変ぜるの時下河辺庄司行平
とめて子細とうかがうに庄司ちゑ入て
うの家のにはらをさのう
と申時より出清を原出とめて御暇
ゆうしと紀すふうち草席を作りて

射法の奥旨をけつ竟草麻のけ
めなり
奥列泰衡追伐の時河村山城権守秀
ゑが男仙蔵丸若年たりといへども
さすがふきんでえんりけく度々矢
をもつてをちをを賴朝卿御感のゆへ
御おふおめく優ふえ服せしめたま
ふ生活件旨の波武勇の功ゆへなり
加冠を命ぜらまくすがいち清の一字
をたまはり河村冠者秀清と号せしが
大義卿彰遠の御亭ふまうしの時
和田小太郎義盛家の小侍し生活ハ
泉賀の左のうに侍すうのち行列
とさぐむうの御ゆ年ごの為宮御社
桑の通会なうびふ三浦御系治の儀
会の事とりおこなふ
南都東大寺遠ちの時四天王の優ど
きざむ長清もうの一人なり

義久三年 乱の時 武田信光小笠原
出雲守人 赤山城の大将として五百餘
騎を引ひきゐ 馬を相たてふる
敵敗北して 勝利をゆるすの時
この武功
天性弓馬文武の達人なり
仁治三年七月十五日 辛酉 八十一歳
出清寺 業曽居士と号す

光行

三男 母八上に同し 南部二郎と号
奥州南部の祖

光清

四男 母八家の女房 加賀四郎と号
義久の字治合戦ふおかく一番小敵を
うちとる

光俊

五男　母ハ上に同し　於曽五郎と号す

長経

嫡男　母ハ新中納言邦綱卿女

高倉院の御字治承三年五月十七日

山城守六波羅小おのくらゆき

童名　豊光丸

建久二年十一月五日十三歳にして元服

加冠ハ頼朝卿　理髪ハ下河辺行平　六波羅太郎と号す又ハ孫太郎

従四位上　民部大輔　治承四年

別従五　右馬助　頭　右庫允　弾正忠

兼左衛門尉　昇殿　伯耆　相模　伊豆

甲斐　壱岐　淡路守の官位ふして

信濃国の太守なり

正治元年十二月十三日　成道　二十一歳

礼方的伯す師範ハ祖父壱光又ハ清

建久正治の比頼家卿の近侍として
因顧他ふるまひの所ゝ紀極京平三
京時号治とうけたまはり出強なる
びふ近習五人の淫類ハ縁倉中ふかめて
たとし粮籍をなすも敵対すべかゝ
且五人の外ハおそれのもなくして
御おもへいるゝ所ゝ代命ふるゝ
技軍のおごり堪忍して頼家卿滅亡
の時出強ゝく幾所ゝ

元久二年建仁寺供養の使者として
て入洛す
業元元年寶朝卿の師範となる
第久元年乳の時又出清ふるゝ武
功のかゝれとあるゝ
仁治三年八月十五日出家六十四歳で倉
入道出禅居士と号す
寶治元年十一月廿卒す　六十九歳

長房

二男　母八家の女房　阿波孫次郎
三好と号す　後とうけく淡路の番衆
阿波国の守護となる

長綱

三男　母長弾小四　伊那三郎と
号す

長光

四男　母八上に同　八代四郎と号す

清家

五男　母八上小四　小四五郎と号す

時長

六男　母八上に同　伊賀六郎と号す
弓馬の達者なり

朝光

七男　母ハ家の女房　大井七郎と号す

教意

八男　母ハ上に同　八郎　西覚禅師と号す

為長

九男　母ハ家の女房　小笠原九郎と号す　寸譲をうけく甲列の不領る侍す

行長

十男　母ハ上に同　蒲池十郎と号す　高島の祖余一

清時

十一男　母ハ家の女房　毛利鳴海与市と

号寸法小袖をうけ家列の義絵と
なり高天神の小笠原氏流なり

長澄

十二男　母ハ上小田井　大倉余市郎

号寸号のよてなり

長忠

嫡男　母ハ武田大膳大夫朝信妹

土御門院御宇建仁二年四月廿六日
信濃国那須松尾の城ふくらもち
童名　そ松丸
建保二年二月十三日小笠原ふして
祖神の社壇小おのく元服又次郎と
号寸　従五位上　右馬助　兵庫助
民部大輔　従四位下
三河の義絵　従五位の方
嘉禄二年三月五日弘法的師範祖

又七清又七郎
安貞二年五月卒泰時ノ師範タリ
文永元年十一月三日卒す六十三歳
法名乗蓮

清弾

二男　母ハ中二位中将重衡女
源二郎と号す　又ハ六波羅二郎
赤澤山城守

譲とうけく伊豆ものの司職タリ
伊豆ちゐ小弾
赤澤の祖タリ

長持

三男　母ハ家の如房　小笠原小次郎と
号す

長能

四男　母ハ北条小四郎
下条四郎

號す　源理亮

下条の祖なり

尊宣

五男　母ハ家の女房

長實

六男　母ハ長忠卿　小笠原五郎

と号す

觀照

七男　母ハ家の女房

盛長

八男　母ハ京の上野六郎の女

号す

長村

九男　母ハ上に同し　小笠原七郎

又八来里入道と号す

長政

嫡男　母八条桐義人変為基女
後堀河院の御宇貞応元年七月十
九日信州伊那郡松尾の館小おのく
うまる　童名　光丸
嘉禎二年正月十三日十五歳小しして
祖神の社壇小おのく元服　孫次郎
と号す　後四位下　太馬卿　大膳大夫
信濃守　三河の義頼　信濃国の守護
寛元四年二月五日　糾方的伺す師
範八長忠
建長四年六月三日小条時氏　最明寺と
の師範となる　号す
弘安十年二月十五日出家六十六歳
法号長阿弥陀仏
永仁二年八月四日卒す　七十三歳

長冬

二男　母ハ上ノ同

長勝村

義人太郎

忠縄

三男　母ハ上ノ同

小笠原長之

と号す

顕雲

四男　母ハ上ノ同

お家

長氏

嫡男　母ハ村上義松園忠女

後後院の位寛元四年八月十七日

信濃松尾の館ふくせる

ハ名を松尾

正嘉二年十一月十三日十三歳にして

元服加冠ハ祖父忠　義次郎と号す

法皇位上　右馬助　治部大輔　弾正少弼
信濃守　従四位下　信濃国の守護也
文永五年三月十五日　威道　糾方的伝
師範八文也改
正安三年二月十五日　出家　五十六歳
法号　長連
延慶三年八月十三日　卒寸　六十五歳

長朝

二男　母八上小弓　卿次郎
民部少輔

長直

三男　母八上小弓　小笠原三郎
初使河原と号寸
譲とうけく三列の不能小弓寸

長盧

四男　母八家の女房　四郎

長義

五男　母ハ上杉氏　弥五郎と号す

荒人

長数

六男　母ハ上杉氏　小笠原右京亮と号す

泰清

七男　母ハ上杉氏　小笠原十郎と号す

宗長

嫡男　母ハ結城氏出羽守長房女

龍山院の御字を文永九年十二月六日

信列松丸の鍛冶

ハ名を松丸

弘安七年正月十一日十二歳にして元服

神の社壇に奉納　孫二郎と

号す　法五位下

右京大夫　治部大輔

信濃守　扇谷と号す　信州の守護なり
永仁四年八月十八日　件の方的伝師範か
出氏
元亨三年二月十五日　出家　五十二歳
頌出と号す
元徳二年九月六日卒す　五十九歳

泰氏
二男　母は上小田　小笠原入道

出綱
三男　母は家の女房　矢田三郎と号す

為頼
四男　母は京出に同　北条と号す

政宗
五男　母は出綱に同　山中四郎と号す

光宗

六男　母八上小印　十郎次郎

常葉と号す

長與

七男　母八牧の女房　二郎と号す

赤澤彈正忠

經氏

貞宗

八男　母八上小印　清光二郎と号す

清和天皇十七代の後裔修濃守宗光が

嫡男　母八中原經行女

伏見院の御宇永仁二年四月十二日位

列侯那須松尾の館にくらす

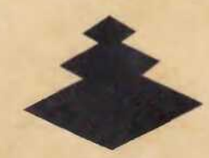
童名　光松丸

徳治元年十一月廿三日卒ふして

祇神の社壇ふおのく元服加冠
表五郎と号す　正四位下　右馬助
治承大婚　位階昇殿　三位ふ
兆驛　越前　奉列号の爰位ふして
位階ふのち讓たり
西和二年六月十二日成道時ふ二十歳
仲方的位師範ふ
後鳥羽天皇の御字位ふ參内して
馬を丹墀ふたらしめ射を金門ふ
乃ち名誉をなげ御師範ふ
ゆうと紀帝南殿ふ出御ありし時貞家
馬上ふしてうの義をなりハしめたまふ時
御手を鞍のとふけらを鞍のうちの秘
伝を叡感せしめたまふ家門の面目なた
ぶとうこ至ふたんや是所れ冥意天の
おうれいかがこさうし貞家漢学中
と云こ去りのこなるず蓋工大義恵り
命して貞家が像を繪かしめたまふ

いまにいたりて法隆寺山長清寺小野
衣冠の像おさなりう
ゆるえみおよりてうの法の奥儀と
たづね下さるかくて光を辞すると行る
ゆるして鳴弦矢丹生の秘術をおしへ
なりうの馬の家とくひ天性の達者とひ
数感のゆるり小笠原と日本の武士の定
式となる尾さのむま御手判とる
したまりう西三位小納言藤原王の

一字をもて家の紋とする尾さの勅定
とうりうまりうとくとも冥加おうれ
ゆるふりうひうふうの字をるどう
て紋をいまに松波義氏下さるとうる
法光なり



ゆるえみどく大遍照と崇じたまふこ
と毅生といまめくなりて貞宗

奏状とりて中ていく大進物禁制の
法をもさまたく遠會獄まぐふおよび
万民仁政のいとなみとまるとくゝ
弓箭よりたづさりの人武藝のもる事
むことをなげく屋きうの少へハ歩射
のいとなきうの遠きふのゝず騎射
乃法あなとこ事甚歟とあ世くしたよ
事のりされハ大進和ふおぬくハ射弧の
皆要駆遂の妙術なりもるくのたふ

こ事を中にのゝずおやけのあなり
家のふあふとくふのゝず道のあなり
もこきの奏状ふりり禁制の法を
やわたまふ奏状の類別巻ふ詳なり
元弘のたくひふ義貞ものゝ対
勅宣ふりり貞家伝列飛列あるの
勝を引ぬく一方の大ゐるして武列
入道河鶴倉ふおぬく数度の武功を
のゝ子

師の弟子となり貞宗大鑑禪師の室ふいり
弟子の礼をなして出道發明ありゆへ
禪と正宗と号し道号を泰山と称す
位列伊賀の庄ふおのく禪刹をし
しめ国君なるをなづけ河内中村の
郷を寄附す大鑑禪師遷化のゝぎり
貞宗禁中ふ師てをでふ入龕の有へ
ちをこそう嘆していく落涙ふちり炬
火をかうけざるのうし龕ふとりつき
落涙子ゆなり出ることいろふ龕中より
貞宗とよぶ品師奇特のおりしへ
となして龕をひらきおしを見まゐ
禪師おさ師ゆりて硯をこし炬火をと
もへく大鑑再来ゆ来ると出るして貞
宗ふ師ふ歴劫不回後の道理なり
俗月海を修り通仏の格式又武の達
人なり
観應元年八月廿五日辛寸五十七歳

葬送の夕御史臺ふみことのりして
先とまゐらしむ時の人道をさえ
とりあつまりまゐるものなし
岡若寺泰山正宗居士と号す

宗隆

二男　母八上に同　小笠原孫次郎と号す

女子

武田伊豆守妻

政長

嫡男　母八義原光義女
後醍醐天皇より御字元亨元年七月
十日位列府中井川の館にて生る
ハ名豊松丸
元弘元年十一月廿三日十三歳にして
祖神の社小笠原元服　孫次郎と
号す　従四位上　右馬物　兵庫頭

を以外　信濃守　兆驃　越前　江前
遠州等の管領　信濃国の守護
建武三年六月十二日成道十八業　仲方
的伝師範　貞宗
将軍等民卿ならびに義詮卿の師範
として武士の定式となる
等民卿入洛の時武者所となりて弓馬
の法模を示す　諸軍ともくくもれふ
意ず

建武より貞治ふいたるまぐたびくの武
功おのおのとゝもに書を略す
ゆゑに紀禁中ふかぬく統の内の寫
ちゆ也おく庭上の末ふとも設も勅
とうけたまり墨用をゆくこ是をゆ
寫と墨用のうちふこゝなぐいとして
統のうちへ是をれしばいさゝも仕が
なくして勢をいぐせり時の人奇異の
おもひをなせり

五社行幸の時改名仕り小先駆をうけ
たまはる
康永四年八月廿九日天竜寺信義の
随兵の先陣を勤む鎌倉大将殿
時遠光長清等が例を引たまふべく
なり
当氏卿の為君御参詣の時列座す
御上座ハ云方　小笠原　武田なり
当鎌の作法ハ門葉設京二重をうけた
まはる
貞治四年三月廿五日卒す　四十八歳
東禅院入道志都真光と号す

宗改

二男　母ハ上小田　孫次郎と号す
天竜寺信義の猶子

宗満

三男　母ハ上小田　孫三郎と号す

掃部助　刑部少輔　法名聖戒

政孝

四男　母上に同　七郎と号す

治部少輔　治理亮　弾正少弼

法名真孫

天竜寺信叟の通名として御剣の役

をつとむ武勇のかたましかりしとい

へども

さ迄と略す

長基

嫡男　母ハ本曾義純が女

光明院の御字貞和二年正月廿七日

任列義慶弟井川の鈴ふく丸

童名豊松丸

延文四年十一月廿二日十三歳にして

祖神の社小おゝく元服加冠

孫次郎と号す　法田佐上　左庫初

彈正少弼　甲斐守　三河守　信濃守
兵部卿　越前　参列の義領ふして
信濃守の守護たり
慶安元年五月十九日成道仏方的他
二十二歳　御範公改名
将軍義満公の御範たり
明徳二年内野合戦の時軍法を評定
してきい迄をおこなふ武功他ふくなり
名基と嫡子名秀と百同答の書を忠

らる
慶永九年二月十五日出家　五十六歳
名基院大隨清順と号す
慶永十四年十月六日卒す　六十一歳

清政
二男　母上小河
幸仕る　中川二郎と号す

氏長

三男　母ハ上ノ国　鴻巣の祖なり

長秀

嫡男　母ハ武田信興の女

後光厳院の御宇貞治五年九月十日

従列府中野川の館ニ生る

ハ名　長義九

永和四年十一月五日十三歳ニ成て祖父

の社ニおゐて元服　又次郎と号す

従四位下　右庫助　修理大夫　信濃守

従列　越後駿　越後の介　信濃守の

守護

応永三年八月十五日成道仏方の時　二十一歳

師範長基

位ニ成て三義一統とさゝぶ元来小笠

原ハ弓馬の家ニ而　礼儀作法の品節を

たゝすべきのむね　厳命とゝ成時ハ

小笠原ていくさいを小今川家大変
氏頼伊勢武蔵守憲忠の器量の
たるうかゝとおさゝるのをと
言上すさまふうてはあ人をめし
くゝらゝ友よ三義一統と号す
相國寺供養の時台たり後醍醐天皇
の御宇小天竜寺供養の例なり
應永十九年二月十五日遁世四十業
大通寺後中正儀と号す

氏朝
一男　小次郎

氏義
二男　五郎

政康
二男　母ハ上ふ同

後圓融院の御宇永和二年四月十五
位列府中野川の鮎ふくせる
童名豊松丸
嘉慶二年十一月五日祖父の神忌よ
おのく元服時より十三歳　表五ちと
号す　法四位上　左馬助　頭　治部大輔
大膳大夫　位法ち　昇殿　中将
遠江　駿　越列　美濃　上野
下野等の受領　位法ち　位法ち
慈永元年六月二日成道　仲方的孫十九歳
師範を基
永享四年三月五日将軍義教公の師
範たり
名秀通世たるふしち改康其家法と
ひく村上平賀源方等の門葉なるべ
小五人二郎といふがずとくいふものなり
鎌倉の持氏退治の時大将軍となる
家長二木小七郎貞明は時采配の大将

小猶せる毛数度戦場小おゐく武功とゐの
らるる鎌倉没落す
此時よ門葉の下条弟るうち死す
持氏切腹の後子息春王丸康王丸日光
山ふおつと以ともおひつあらるるのる
うかるずして結城の七郎とたのる城
ふ到ちとうと以ども時日とうさず
おしませる合戦数度小おび終よ
落城す此持氏重代の義なるび

小春王丸康王丸いけどる生て美濃ゐ
京井の道場まるく生害す此合戦乃
賞として御重代守家の御剣とたま
り虎賁の猛将又武の達人なり
嘉吉二年八月九日卒す　六十七歳
法名天関正透

持氏
嫡男

母ハ家の女房　代女房大名の子三人生
長ハ管領畠山尾張守　仲ハ小笠原右
季ハ能登守　江馬こ生なり
後小松院の御宇　永享六月廿六日
源陽四条の館にて生り
母ハ名　豊子代也
永十五年十一月十三歳にて祖神
の社小おのゝ元服　又次郎と号す
従四位上　右馬助　大膳大夫　任侍
奥州　能登　上野　下野の義教公
任列の守護なり
永二十七年八月十三日成通卿方の猶
二十五歳　師範ハ改康
将軍義政公の師範なり
寛正三年六月十九日卒す　六十七歳
法名　高岳正隆

宗康

二男　母ハ春日の長女

十業して元服　松尾五郎と号す

右京大夫

し宗康ハ不思議の再誕なり年六歳

孤のひぎり忠岳といふもの善光寺ハ

糸繁の時小笠原政康五百騎を隨

てうの行粧おごうにして善光寺ハ

詣す時ハひぎりこ迚と乃く感じて

いく人るゝ生とうるものハ孤ゞくハ

かくのおとゝきのうちひなり忠岳

頭陀の生涯として費及とけ流浪行

脚して文ハ益なし佛ハちゝくハ

笠原の家ハ生まんとするゝ御堂

うしろよたちたるゝ婚ハ忠岳の二字

とゝりつけく仏と犀川ゝ投ずゝの

義政康が書夏よかのひぎり胎内かん

とゝふと乃くもむすゝて男子と

うめりうの子を乃とふぎりて生ゝひき

てこ迚と乃れだたるゝ乃内ハ忠岳

の文字ゆう奇特のおもひとなす所よ
吾光りの石塔と見也と實ふうの文
字ゆうひらくなりて宗康と号す
持出と宗康と光吉の行ひ
ゆう甚子細とくらぬ也ハ又天関地去
の物宗康うしろ見常葉を渡とふ
もの所形の遠ゑのしいつりて家臣
と宗康小ゆうと合戦よおよぶ持出方の
人数ハ二子よりたゝず宗康方ハ吾日を
たゝめ五千餘騎ゝくたびくいどみ
戦て勝負と定やず又吾光寺表
源田原 大馬場と云よおめく一日ハ七度
たゝかて持出利とうしなひたり
七度よおよぶと紀持出藤ハ上野協四
上孫号の家臣とも○ひくい
さゝくいく十死一生の合戦この時
なりとく自身歓軍のゝ時

京康とうちとりかくしたのを
時溝口坂西ハ討死す拾七ヶ年又
留山流ヶ子長右衛門ハ時の義紙
うるハうしけ子細と拔参しいくく
也紙職とまもりしむ
京康子長政秀幼稚のゆへ[illegible]を
少り寸

政秀

ゆゑしハ政貞といふ京康の嫡男なり
ゆゑハ名玉松丸　表次郎と号す
兵庫助　左京大夫　法名賢作

某

三男　母ハ家の女房　三郎　法名拾雄

光康

四男　母ハ京康と同　伊勢右衛門と号す
左衛門佐　幸隆　法名溪堂法捷

経伯

五男　母ハ家の女房

女子

木曾ヶ書　母ハ上ヶ印

長家

六男　母ハ家の女房　七郎と号す

伊那四郎　右馬助

讓とうけく下野の国伊勢

朝康

七男　母ハ上ヶ印　治部卿

讓とうけく尾張の国より行す

清家

嫡男　母ハ高澤朝日入道不説秋ヶ女

称光院の御宇永三十四年正月十六日

任列府中井川の館にて生る

ゆゑハ名豊松丸

永享十一年十一月廿日十三業ふして
祖神の祐ましく元服　又次郎と号す
法名佐上　右馬卿　大脇大史　信濃守
遠江　上野の義領　信濃国の住人
寶徳三年十一月十五日斜方的傳師範
持也
ゆうと紀清家のうちやゆくゆくやしなの
ゆうてさまざまげをなさんとす剱とぬいく
ものときうたちまちふうのまとうち
おとす志ばしばくゆうてゆうものの密かふ事
なぎさてうのまとふ細をたづま
ゆ道ハ狸なりこまとふまでふうおて
うちまとまちまくなんの益のゆうと回れし
バ家小物業ゆうまとをもちくけんを
いするうちうのまとゆうへうれハまの
思とかりぜんとくく甚妙方と伝へ翌日
まとけいぐうちうてうの流と乃母む
我家のう薬是なり

文明十年十二月八日卒す　五十二歳

法名玄雙西觀

宗義を

二男　母ハ家の女房

亦

三男　母ハ上京同　九郎と号す

宗則

四男　母ハ清宗と同　孫次郎と号す

近江守　法名貴言

亦

五男　母ハ家の女房　六郎　左馬助

改豊

六男　母ハ清宗と同　長次郎と号す

左馬助

讓とうけく上野の国に住す

巻朝

是より以下ハ下巻ニ見えたり

国立公文書館
National Archives of Japan

小豆原下

七郎

清宗の一男　母ハ武田信昌女

後花園院の御宇寛喜三年十一月四日

信州府中林の館にて生る

ゝハ名豊前丸

寶德元年十一月廿三日七歳ゝて祖社

の神ゝおのく元服

又二郎と号す　後五位侍下　民部大輔
大膳大夫　位濃守
位列の号　蔭　叙列の義ハ
文明九年九月九日　絆方的伯師範ハ
清宗
清宗逝去の後為勅使京康子右京亮
政秀門葉として一城をまもりて絆那ふ
居住す時は朝為年号をもつて
他門の名たぶりて林の餘よりしいる

家臣等ふせぐ事叶はず母堂内室并
家の文書等をたづさへ又同国牧鳴へ
落ゆく長男左近ハ不ト漂倒するの
石ふ政秀府中より帰る屋敷を号す
去りとゆへども主人為心服せざるふり
始終心ばせとなげかはしく事と楽し
て和睦いまし長男と以て結子と号し
府中をまもりて伊那より彩色
住す後生おろる屋さの古語となりて

小く家の書籍秘伝を継ぎ申し侍
り政秀二通とらく
文亀元年八月十二日卒寸　五十九歳
法名徹叟正源

光政

二男　母ハ上小田　西条七郎
中務少輔

女子

母ハ上小田　仁科が妻

女子

母ハ上小田　長日が妻

貞朝

嫡男　母ハ家の女房
浅花園院の御宇寛正二年九月十八

任列府中林の鈴しくうまち
童名 そ松丸
文明三年四月十五日 祖神の社壇小おのく
元服時 十一歳 又次郎と号す
従五位上 右馬助 治部大夫 任濃守
任列刺史
文明十七年五月八日 紳方的伺師範
出家
ゆうと紀化生のものの毎年さりとなす

射法の秘伝廻群尚とりちくたらもち
祈りて出を見てばみくろふなり奉有
乃ちりと云こ
永正十二年六月三日 卒寸 五十五歳
法名圓山宗碧

貞政
二男 母八家の女房 兄七郎と号す
幸法 治部大輔

俞益

三男　母ハ上小印　三郎

出家して瑞光ちと号す

覚性

四男　母ハ上小印　四郎

出家して朝光ちと号す

女子

母ハ上小印　仁科ノ書

女子

母ハ家の女房　大岩ノ書

長棟

嫡男　母ハ海野女

後ニ御門院の御字明恵元年三月十九日位列府中林の被ル

ものハ名を松丸

永正元年十一月廿七日十三歳にて

祖社の神おのく元服　又次郎
と号す　従五位下　大膳大夫　陸奥守
信濃守　信濃の刺史
永正九年三月廿五日　卒　方的師範
貞朝
也　楠木の城を破却せり　しかる細川先
年京兆の長官大夫政秀出朝
相伴の法式ここをおこなふ乃
門葉を以て光康が孫に当て対法名

徹泉松屯より飯尾小兵衛
家法を相伴す　ちなみに政秀が紙
地伊賀守の庄なるべし書籍を押紙の
ごとく所々のふしに正月写政秀法名
賢法松屯より入来れ時政秀を生害す同
じく政秀が子小次郎も又名子熊丸
二人を宮寺此時京兆が子孫断絶す
政秀同方なるべし小書籍号松屯より
押しざらいあり家の法号ども取りつ

て下条よおちゆく政秀内方死去の後
半籍賊室等下条ようやくして二十四五年
ふくこ丞とかくしそをけを微象もまこ
こ丞とゆまく欲していつりて下条源左
とうびれい源太入来の節元賀沢城
坂よおゆくこ丞を害し 聖日松毛
ちう下条へちりけしよ源左がちて
伊豆守出むしくおたくれ伊豆もと
うち死すうの祝宴石一人ぶりまく歌

射しくきあよ七棟出馬して見を過
おちう微象又子孫をこうまちう一命
とたけく亟電せしむすかうち七棟が
二男民ア大膳位宮十四歳よりなりを
松毛の城よとくこの時下条宮かく
ちう政秀が賊室半籍ホくくく七棟
小献ず
天文十一年二月十五日出家五十一歳
天文十八年十月八日卒寸 五十八歳

法名廣澤寺天祥正安居士と号す

定政

二男　母ハ上小田　長次郎と号す

左衛門尉　法名慈房　武田信玄の師

統最

三男　母ハ上小田　永福寺三省軒と

号す　南禪寺後堂首座

名利

四男　母ハ上ヨリ　孫次郎と号す

民部少輔　法名吾悦

女子

母ハ上ヨリ

名時

嫡男　母ハ渕野辺弾正忠女

後柏原院の御宇永正十一年十月廿二日
信濃府中林の鈴しくうまる
童名　亀松丸
大永元年十一月五日十三歳にて祖父の
社おかくえ脈　又二郎と号す
法名信上　大悟大夫　信濃守　右馬助
信濃の刺史
天文四年伊方的信寸師範八幡
武田小笠原一門とゝもたゝひ
戰場をかけまわりしひさし亭孫ゝ
天文ふゝゝて武田信虎同晴信小笠原
両時と合戰ふ所たゝかくなり門
葉諏訪村上仁科等と先ゝて甲
列なゝびに柳過ふ所おかく数度の働
ありて当時利をゆゝ信虎
晴信信濃ゝゝゝて長時と雌雄をかゝ
ゝひかの時ハ今川義元とかゝしひ傍負
といとゝとゝゝゝゝ信濃のゝゝを

うだふとなりて晴信時よりて斗
策をめぐらし米五百馬物五百年ごろを
ふく諏訪の頼茂と結び
板垣信形をたのうして頼茂をたのみかくし
頼茂武田ごに力をたのみ甲斐
として信列おさまるふかめくハ村上信
武よくいくさを始めたのうしと
信ぶさまのぶるゆへ頼茂屋ぐくきこと
けして妹むこなり剃髪先腹の

むすめと人質として晴信より手元来
頼茂ハ出家老小見ゲ奪ごうとゆゑ
書状をもて晴信よりたびたびさるの条
お代表ゆの通なり
諏訪頼茂武田と縁をむすびくこう小笠
原家とうしくゆへ出ていて諏方地ハ
信列要害の不なりたるに頼茂武田よ
属ごう事當家のうぶく色きこなり
ゆく出時お馬して諏方の紙地をまく

放火し頼茂が居城上野原をせめ敵
数輩うちとり城ぐり相対ふこと
武田晴信後詰として使多来よくり先
板垣信形飯富兵部少輔方新書柳よ
陣をとりまし時頼茂がおさへを
おこさく仁科伊勢守坂西下条善兵衛を
先手としてせむひ一戦をとげて板
板飯富兵部少輔ときりうすのろ晴信
ちうへずしく敗小す敵の首をとりとり

車五百餘勝時をのがれ下り頼茂さは
く降参とひ人質を出して又旗下に
なりこ至ちり林の館よ退原す
いくかなくて頼茂又小笠原方の人質
を拾く武田晴信の先よと
なりて善福の城をせむ至ちり時
後詰として馬を籠城もく出すとい
反逆人の居不返ぶて甚上善福
の道の難不よ敵方ちり不ことおさへを置

のるうまを追掛ひらちをかんとすく
て里外に逃奈し其猫の城ちへ入して
和睦とゝのひ条ぜひよりゆず林の館に
くる
源頼義晴信とたゝかひ甲州
まく生害せしめこれをさゝひの法を
うむく事たびくして表裏のふつう
天罰のいなを不なりこれをもつて頼義
が被官の士卒ども晴信に対し軍を義
さんとたくむくいへども頼義がむすあ晴
信が妻女たるよしもつゝみくなるをもつて
晴信に帰服すこれをもつて源氏の城代と
して板垣信形をもつゝくこれを守らしむ
甲州より源氏城代を置事奇怪乃
いたりなり子孫ふかをすの食さのしも
一門の中へおもつて出馬して源氏
の城をこゝみすぐに落城ますの付和
睦とゝのひけんとゝもつて加門業

仁科通外記の地と一条よりくおこなふ
ばかりのものみとこゝろおとろざる
つゝ事あれども当時ゆるさるのる
仁科四郎と云武功絶なしという
けれども力同じとの具して居ずして引
いりゆく諏訪の城代力なくゆつし
と成ること当時が家門衰微の基
なり仁科左外居ずして諏訪
の城力なく晴信しろづめしく為

家の安曇山遍三村とたゞりて当時が
うろ切とるゝよりおのくゝ当時が不紀
のこらず女人よ宛判ゐるこの誓約
れ状とけらゝるる所よ紀掌す当時う
つて事と云ずず地軍と引ゆく諏
訪峠よりあるく合戦ありて一日の中
よ六度おたゝし当時ゆるくゝ度よりぶれ
ゆう中小ゆるくゝ度よりぶれ
当時籠城と云く押ゝ晴信籠城

と切らずされ不ようしろの峠より山道
三村二子金騎まくらう切とて時
勢と向ぐろの石井時城より後とたて久
て西陣より對しおたくいくもお
亜の道こゆ門葉家光巳まうう
逆日およびずして敗北の刑歌こと
まるる井時自殺かへしの毒ひもも
切おして陣ぐがなく平城ようちこて
まぐらくひりてうまうち村とまりて

流人す村と義清先祖の西流を尋ねず
井時とまちうはけく なんの計策とあ
ぐすず不る晴信村井 まくまくまくく
時林の城ちうかく山せぐとくぐもつ不
落城す
武田方ちう井時が石城林の鈴を破部
し源志の城とうちまく城代として場
民祝日向大和とさしとく
井時村上小澤の物溝口英地家の西房

極とゝのをけり金紙とゝ云く
其時よ獻ず又天保の子玄蕃不能の年
京とゝの人て能騎越後とまゝり村と
よこゝゝて其時よ獻ずけゝゝびとて
吉光の脇指小狐のちを溝口ゝけゝゝる
地じて溝口先祖代相伝いく討死す
忠節のさゝゝひゝゝ
小笠原家光大夫手柄ゝる城とゝ人く
なを晴信よゝゝさゝゝ下よ村と義

清其時が知ゝと達せんがゝゝ軍勢と
りよ知してゝゝくのゝきゝしゝゝば
歌ゝ源志のゝる場民紙拍尺とて来
明ゝゝ出又大夫大歌物其時がむひく
して能屋原の峠ふ出ゝの時ゝる場ゝ
あひ大夫こゝを味方の勝ゝんゝま
ゝく使と馬場民紙が方よ伝ゝゝて
其時知ゝこのゝる村と出陣のゝけ
たまゝゝあゝぶゝる大夫も御むひて

まう出のうまとりかしばる場
大きふるこびく係りて出合しるハ
出時むひとして出るのもとも
神妙なり源志の城とせむ屋きの弓先
げとるさるを屋さのうち中ばかりして
ら場するうちみ源志の城へ使を遣り
大将たいま出時がむひとして打出
のる兵撰といくく相ばむ屋きおり
ゆとる見ようり源志ら撰を出して

大将をとりこむ大将を撰少へ居城よ
ゆんとすしもうるとすして郎おく
くく討死す大将ハ良馬よ乗少へけ
ぬけて二木豊後方よいるそれら
きぐふ馬場大将の体とせあおとす其
後亦平洲の城へうかけく終日戦
城とおくされくる平洲切腹す
出時なるのあ村と人数とりて
信濃の府中まくくの村とは

多賀原よりうち出る時ハ河ぶちて氷
宮ふ庫とちろ其ゑ家人当惑仕ふ
むろもの二子鎌駒とも世のつまり逆心の
軍鶏ちの城とはじめ山ゑこ村の城
りけしてふ城中ものども武威
おうゑて降人ちうけ外堀廃西牧
坂西号の逆ちこのゑ人ちうず西服し
て明日ハ村上ふ同心して馬場氏於月つ
大和がたくごもり源志の城へとうけんと
許議して出る時ハ清ひちり進ふむひ
村上ハ宮河ちり揚しまくむうんと急る
とちろよ武田晴信甲斐ちり出馬し
て村上が居城よりうのしうの
きこて明り是ちりて村とうちり
当間と出時よ通ぎるまとなるぞし
て敵中ふ我塚ふ引入る時是とき
くいく雲物とたがつく塚よ明ち事
云念のいちりなりうくこのゑなと

ちりなりバさらぐ〳〵ちりぬさものと
とくいきとりつるものゆきうるゝ紙屋でも
晴信ハ村上よりせどして舎弟高坂弾正
山県角兵衛と村上よりさしむけく晴信
ハ源志の後詰として出ちらる事ハ
出時が古卒村上が引きうく事とお
どろき又晴信が大軍とおそれく矢
張りれハ味方ハ〳〵ゆ騎ばかり
晴信が先手として飯富小山田淺利真利

号後をたつるものハ一万ばかりなり出時一
千の人数を一ヶ所よりして下知していく
今日家後の合戦なりおのく出時う
ぢくだしといひく姫といふ名馬う
ばり先ますんぐ重代の者ともく
むふ歳十八騎を切おとる弟甲の
ちらと切りうるものあまなり是ちら
ちの力と甲破く号子孫人号も又身
命をすてく おたゝひ晴信が先手飯富

小山田なりしが孫右衛門人山田三村ふを
けちらし晴信が旗本を見うけて一文
字にうけ入おしくづすの晴信の家来
よ敗北す首をとらるゝ三百餘騎時
をとりあをこなひ出奴田中ハ出あて
財机よりとりけり首の実検をす
この軍勝利をうるとゝ以ども和泉志
よる場民於島大和守又ハ人数を
うむくうよ一ゝびを持ちけり村ふを

とゝ文たのしをふゝのずを逃さハ
ぬ出ハ出時切腹すべきのし 相議ろ
のすよ二本豊後いさめくいく大将切
腹よおゐくハたを出ゝてう敵をるば
逆さの軍を求ゝをうんやうのう
大事平風が忠義とむふしくるよ
にう先身を全して大義をるを
し出ゝうバ我中塔の城豆国の思なり
人数三千ばかりの五三千ばかりの義

とおめ弓矢を用ひして志ばらく
世間のかりさ海をへぐむをしく一途
小いさもつのる一家を引ぐして中塔より
おりを時二本おかりて帰るの
よりけを宮じ
晴信数日をへずして中塔よりけ
出をとうろへく中塔の山八ふまで
せあのかる出時城中の二分の人数
を引ぐくうち出来陣をとりて諸勢

を下知し切ぐをゆ晴信小宮原より
いくりて敗北す出時ふるをとをて歌二
百余をうちとる晴信馬をうばい入
中塔の合戦もゆ出時勝利をゆ
諸人人出過ニ村仁科塩田鳥居等
弓矢兵粮をとりて陳謝す
晴信ゆ中塔の城よりけく
たるゆの下城中出ゆのさゆ大
れ二本白馬ふりてけぐを飯富

よろい兜と戸くくりの馬より賣ゞて
やとくいひけれバいまゝてうち陣中にも
賣買の作法兜ハ行ひ下地ハ
て賣ゞしとき武ふ又同名ハ行ひこ
ハ武具の馬具のゝ名報のゝ名みふ
といふ二朱がいくらの行ひのるまハ
行ゞ遊仏の車三村山をうしなひる
晴信が首とるとするおのくこの馬を
ひのゝ甚方おのゝ甚方おのゝ

頃方姫合戦より出時五度勝利をなし
度ゝの合戦ゝも出時強ゝうすんで
勝軍のところ三村山をうち切を
うしなうより利をうしなつて出人
とかりこの遣ゝ信をれがゝさのゝ晴信が
首とうけとるふおのくハ出時がなさ
とくゞゝとく歌是をきて出ひと
いきとり矢と射ゝけ合戦をはじゝ
けひさ三度ゝおしくく晴信又馬を

引入

其時中略ちてき湯五人の軍
がたくぎりの所の城へとりけくたび
くおたひ勝利とゆく敵のもと
うちとりの紀ちる小およぶ
其時数度勝利とゆく方へちき
のちとき晴信おどろひくいく其
時さかりく大軍ふなりざるうちよみ
和の合戦をきもひぐしとりて大軍

と引率しおもひちき其時小宣家よ
いり人数とぶしたたひよ先手ふ
うちのひ合戦ふおもぶ武田ふ切ぐ
さまく引ちりく頼と討ちる事
二百余人方籠城とゆくけ人ちる
たびくの所ふ謀反人三村山遠稙義
塩和仁科等横合ふ出ちかり其時とけ
ちすとい(ども)敵ちりぐ方ちしども
大軍とくへ入たちる味方ふ

うちたく中塔より引退く晴信もよし古
幸ひのまこうを迎く由緒なり
村上義清晴信によりまけく越後へ
宰人す甚ハ後晴信方より使をく
也時よりげくいりく行列を迎く我
よいまく也時一人中塔でらそい
憑思ひがくかんのる幸ハ一門の
みひのうへ武田が難下たるバ如何おも
なくまるすをさのしも折ら象をく

中塔ハ也時ハ答ハ武田ハ兄
小笠原ハ弟たりといへども武田ハ代こ
ハ小笠原ハ勿論小笠原ハ勿論
武田ハ上杉ハ勿論小笠原ハ
也時が代よりて武田が難下ハ
こ中也狂ハ和ハ武田が難下ハ
ハ同じ
ハ晴信が折ら象をかへす
ハ中塔ハ也時ハ
教答のたひひのりといへども情貧を

次ぎ御後こうの言上時家光と
評定していく行列きくく晴れる
属ちうへ仲塔を始めかへりて
通信をたのを越後上洛人をもて
いけく作がなく中塔をもくもてきて
わ二本豊後国高田藩毋人と中塔より
しとくきの毋人を時が越後ようち
事をきてこでけく羽上くの玉中塔
の涙をかけくを時が紀をもひ越後

ようちを時越後ようあくく京所武信
ちきこず是ようてきちやもく清毋
すかちき通信ようを対してひちうち浪
ていく我いまと京して云分ようを
しかこの牛略とめぐちすをしち
通信ちもくやもてこと百余人
のひちちひとりもこの時を時
二本をびくなんちかまかり
武田ち属して時が達ち

御ハらもとをうばゝるべきなり乃ち
ひとくむこゝ本辞ちよゆゑ
紙業しすかゝ黄金百枚を時ゝ
二本を後ろ
うのうへ中略より数世ちよ三四年
おまもるすハしゝ金貴吉次が子孫
婚姻次ゝ
して上京せしむ
おとなるの奥列へ
仕法よ行て女子をもうけ二本の子
よ嫁す姉次死して男子なきゆへ財宝
おくくむこよ譲ち吉ちゝ二本が
ちゝ人よ自分の業花
とうぶして出時ゝ財宝を
いやと事ゝ二の忠臣
其後二本同宝の大昌上為氣
晴信よ属す晴信二本が日出時ゝ
忠臣ゝと感じてすゝ二本が

中納言を遣なく二条を切ふ
其時越後より浮勢國より越て木曽板
倉大夫が不和帰国す其時が氏族
三好長慶天下の執権ふるふ使を
つくる方より糸向すべきのよし
畠山より使をもつて上京せしむる方より
糸勅すかりて其時が場悪らとして
河内国を宮内安ナモナ不思議せしむく
弓馬の師範より其以後こなが悪

逆ましくる方と絶しまつのる其時ハうれ
しう奥列舎ハよりハ地しく辛す
時ハ天正十一年二月廿日六十四歳
法名龍雲正麟

信定

二男　母ハ不明　孫次郎と号す
民部大輔
位列松尾の係より後ハ湯場種川

義氏討死

清鑑

二男　母ハ上同

出家

女子

養澤頼親ノ妻

貞種

四男　母ハ上同

清義と号す

落髪の名　河雪斎

統虎

五男　母ハ上同

出家

右隆

一男　母ハ仁科道外女

右馬助

源と号す

越中國戸山に於て討死

貞次

二男　母は上杉四郎
武田晴信が養子となり
お家の時の名　年号　還俗して右馬物
と号す　位列れなしに於て死す

貞慶

三男　西端たり　母は家の女房
後奈良院の御宇天文十五年八月十二日
位列林の鉛と号す　童名小侍
永禄元年十一月十三日十三歳にして
曩祖氏神新羅の寶前に於て元
服加冠　義信と号す
従五位下　右近大夫
永禄五年紙方の傳師範　長時
貞慶　氣質豪邁なる者

人まもしらず出家遁世時鐘愛とゝ人
ていとけなきうちかうとるをもつ
ず家法を遂くこと能はず
出時運拙きて数代の本領とるれし
三十余年のる流浪せしを貞慶ゆき
しりいさどりうとくみ日月よりのきさ
任心をこうして天照太神八幡新羅
ようりをうり奥列より下つく出時より
対面すること子の親愛ひさしうすし出時

こと出と幸として家の文書重代乃籍
なりしを遍通の剱 改恒 寄 守家
甲斐号の寺授受の儀としてこれ是
を伝せしむいうく家業をうち武義
をたゝしこうしてこれ中さとげんが中絶
ひうふなまうそう人数をもつとも
いへどもきいつもざるの浦場
まうへうのらいをなくみなまう
くうて門業の被をおりうすれ

異後よりおよぎ寄せつまりこの時源志
の城ハ越後の上杉京極支配となる
是時ゞ出羽国谷地とりたて桃田と
ふものよ千の人数とうつへく是
とち護せしむる奥慶軍勢の
外とそこぎめ無稿下条溝に林大身ハ
と先よりて汗うの中小おく
二本一人よ来源とゆゑ其外国人の
うゑ源志の城よりせく不日う
せあ屋ゞり本城ゞりおのゝ時和睦と
なく城中の穀物がなく越後ふく人
さうく ふおくいくそじとのゞく西ゝり出
屋さのゝ寄手のゝ
まゝ城をうけゝり奥慶會稽の和と
きゝあ三十三年寧人の怒憤をもに
ひゝき源志のゝとゝうゝく松本と
号寸海ゝく小高家再興の英雄とゝ
屋し

うのちと板東勝一戦とげんがたち
を國の諸將とうちひく数度いくさ
たゝかい(ども)自慶勝利とゆく盛を
進むよわるふ
天正十八年相列小田原陣の時羽柴
筑前守利家と自慶と中山道の大將
としてもと小御書と自慶うたまりう
先ゝげとうしてひうふちうちもと
めぐして歌とたゝるゆへ松山松枝ふ
の城峰ふしうびふ八ちゝ城とせち
おうしく武功法れるよりとくし
文禄四年五月十日下野の古河の鉢
うく卒す五十歳大隆ち心清家得ち
号す
累年本紀ようゝ門葉家老敬をせ
むるの弓是をゆうたゝく四儀の名字
なうびゝ係級号をうんぐくこうを
記す

進士
小笠原
六波羅
平賀
奈古
東条
柏木
畠田
早水

加賀美
秋山
大内
安井
田井
山中
錦織
上条
河内

遠見
一条
白川
曽祢
利見
玄鴻
大島
稲元
深津

大条
小松
三浦
今井
伊沢
飯富
小山田
小田
荻袴

上条
百目
高田
倉科
岩崎
水内
伊那
伊勢
鳴海

吉田
石水
巨勢村
山宮
身利
穴山
八代
大井
大金

高畠
芝毛
三宮
上田
麻殖
素屋
朝日
鷲倉
平屋

原
中川
貞光
特戸
更級
鳥部
深田
松社
波合

矢田
二宮
鴻田
羽部
堀崎
大瀧
清水
平田
飯田

飯鴻
東方
小方
知津東方
高樹
海野
坂城
小竹 松坂日原
安田 松坂大河流

天田分
西方
金沢
新津西方
下山
望月
村上

庵岩
南方
佐久木
小野
仁科
蕎麦
本當

武田 松坂割菱
清利 松坂扇

菊紋　松皮九曜星
三枝　松皮釘貫
一宮　松皮日雲
下枝　松皮九巴
獅置　松皮葉蓮
赤沢　松皮十文字
折敷　松皮本紙
山中　松皮日扇
高畠　松皮蓮鏑矢
板垣　松皮地黒蓑
高天神小笠原　松皮水蕗
標葉　松皮九曜星
方名　地黒松皮
常葉　松皮板引松
下条　松皮松葉
坂西　鬼の角松皮
溝口　松皮井桁
鴻巣　松皮菊葵の桂

松毛　松皮丸内卍字
松屋　紙の紋
後藤　葉蓮の紋
二木　松皮幼稚理
大井手鴻一臺　鶴
山名　松の葉

秀政
嫡男　母八日野大納言晴光女
正親町院の御宇　永禄十二年三月
廿一日洛陽に誕生　童名　幸松丸
天正九年十一月十三日十三歳にして

江刀新羅明神の御神おみくじ
五位　位階　上野介　長谷大膳
天正十四年　伴方的伺す　師範貞慶
同十八年　相州小田原御陣の時
東照大権現の伝奉　時ず　此年下野
お古河の城　三百石を給ず
文禄元年　豊臣秀吉　高麗陣　おもむく
さたまる時　北条国名護屋　おもむく
大権現　軍功　奉る

慶長五年　関原御陣の時
大権現の命　三河国　秀康卿　宇
都宮の城　おもむく　秀政　二の丸
番し　里見安房守　義康　三の丸
てとのゝ　系譜　とさんとなる
同六年　古河　おもむく
の城　五百石　たまわる　作列　伴奈
同十八年
台徳院殿の命　おもむく　伴奈　とゝのゝ

西松本の城にて八百石領す
同十九年大坂御陣の時　鉤命ふ
り秀政忠政父松本の城を守る忠脩
ひとり大坂に御もむく
元和元年大坂再亂の時秀政なくなる
子息忠脩忠政を引ぬく
台德院殿の供奉より引し五月七日戰場
にて討死す事父忠政が遺の中まで
法名義雲　京玄と号す

忠脩

母ハ

大權現の御孫女曳倚三郎信康卿の女
後陽成院の御宇文禄三年十二月廿五日
下野國栗橋の館にて誕生
童名　幸松丸
慶長十二年八月十三日十四歳ふして
江戸小石川にて

台德院殿御おくの忠の字とらるさる

元服時より御諱

同十五年法五位下に叙し信濃守

に任ぜ時に十七歳

同十七年三月十五日紀方的傳師範八又

秀政

同十九年豊臣秀頼横列大坂の城に

籠りて反逆の時又秀政舎弟大学助

忠政

台德院殿の命ぜらるる東山道の警固

として松平の城とまもる忠脩一人

従奉して馬上二百五十騎歩卒

三千人を引ひき大坂に發向す御

和睦のなる翌年正月帰陣して

元和元年大坂再乱の時紀忠脩秀政

なるべし忠政と共に討死

出陣のさざみ故を以て

て後方方に討たる忠脩

秀政忠政等ガ命法師ノウヒウち
死所ヲ癖トカウフルものをかゞ
お引忠脩ちゝ
いとみたくくうち死すれハ忠政ガ
僧の中ヨリ法ましかなり
法名西雲　法性ちゝ

忠政

母ハ忠脩ヨリ同し

後陽成院の御宇慶長元年二月
廿八日下野國古河の城ヨリ誕生
童名長松丸
同十二年八月十三日ヨリ初ク
名法院殿御ヨリ元服御諱の
忠の字をゝぐさる
同十五年従五位下ヨリ叙す時ヨリ十五
歳大学助　右近大夫
同十七年二月十五日紀方的伯師範

又秀吉

元和元年豊臣秀頼大坂の城にて自害せしかば浪人ども追ひ散らせしに二度び浪人をおこすこと

大権現

台徳院殿御進発の時五月七日秀吉

忠脩忠政騎二百五十余騎歩卒

三千余人諸将ともに

台徳院殿の御先駆をなして天王寺おの

ゝ道の辺の道よりむかひ秀吉を

て三陣をしてこゝを

の陣よりこゝの大野治長

森豊前守長秀

こゝに豊前守が話をハこゝのうち

たく先をこゝのまへにたつ

治長が云ハこゝにて

こゝに陣ハ永慶ハ

台徳院殿の御先駆をなして天王寺おの

ゝ道の辺の道よりむかひ秀吉を

て三陣をしてこゝを

の陣よりこゝの大野治長

森豊前守長秀

こゝに豊前守が話をハこゝのうち

たく先をこゝのまへにたつ

治長が云ハこゝにて

こゝに陣ハ永慶ハ

孔明の先生
徐庶亮とぐるよりてすぐ出る
年の下刻より出る田左衛門尉是非と秀政
が陣のたより出す秀政甚るとを
ふく是を見くいく他人のもの
勢一人もさきへ出すをうしずとのれ
が先を外人数をくすんで永意と
うつ永意敗走をすると秀政当惑よ
りうろうとをしてをるがうろと
おろくとびうつちふ秀政が二陣

はぐきをくこうとをきくすみ
ずを徐庶亮が白秀政が二陣乃
左後とうしんをする秀政是をくく
ざいとをりて相たがひよりの隙
とのをたりひとをしく雄雄い
まぐ変せざるをおるこうう
をとをすく徐庶亮が士卒とすわ
て横のひよりかり秀政が左後とつ
秀政勢のうへまく十文字の隙を

ゆくさきにふこまをさすうの鎗う
ちおもく馬にうあり別にひとつの
すがりとなりくくもさらく忠脩も
又馬上まく鎗とをのをもをさす歌
の給ひもおうひきうて忠脩よ
むふうの鎗を十ばかり中義
きうがごとし忠脩るとふたまうず
しておいふくひきく歌よ類を
うう忠脩がるとうあるを忠改一

あるくきをもんくいうぎるもうあり
忠脩とすくうんとをふ歌をやふ
鎗とうるゆきをとたうふて忠
改がやりおもをれだすかうりをぬ
いくむふきあるよ歌忠改と堀の中
ふはきたふ一言ふうる鎗まくの
まを不きれなが忠改刀をいく
ちふとゆくも歌つるを堀に入く
忠改をきう忠改をうふをうをを

弘元ぜんとす秀政が三陣すやふ
すんでつゆ歌と遁たちふ吉後
台徳院殿の御鷹をすめらゆ歌
大よ敗北す秀政六ケ所乃癩とう
ゆり逆卒ようたとひけらをく久宝寺
よたりづく忠政八源を四ケ所濃を
三ケ所の癩とかりゆ逆卒の死せざ
ほものまりに四人森乙翻解中京重
撰門作野左衛つ射正吉牧弥次右衛門射

信重京治台衛射吉久号忠政と助て
たりづく
台徳院殿御馬上まく忠脩が戦死并
秀政忠政が力戦しく癩とかりゆ
ことゆ遁みおがめて施薬院
京伯山器与郎作来と久宝寺ぐ
さうをく底のいくみとこうめゆ
忠脩がうち死とうゆ逆たまゆ謀
よ家の面目といよをし十日の言かる

小秀政つゐに死す翌日大坂落城
秀頼焼死
此度秀政が家臣討死したるもの交
名 伯大将ハ二木勘右衛門政成小笠原
主水佐政重鴻巣内膳政継 武者奉
行ハ黒澤平右衛門貞重 足軽大将使番
ハ二木左右衛門政元渡者左右衛門重政
伯矢野半弥廣重白井市右衛門光重
大島次郎右衛門重吉森下吉兵衛
為重百米渡辺清右衛門
長重武井治兵衛氏信多し牛兵衛
友自川井右兵衛忠右百米左衛門
光氏江戸孫兵衛実次黄米内兵物
重継小笠丸良兵衛忠真渡辺左七郎
西久仁村伯兵衛正吉横川武右衛門
京忠鈴木九右衛門右利沢牛兵衛
白勝 二百五十騎の中生くかたるもの

台德院殿御帰陣の後忠政に命じて
秀政に遠江を授けしむ

元和二年

台德院殿の命ありて松平忠吉に
備前の城を加増行て十
万石の地を給ふ

寛永九年

将軍家の鈞命ありて明石城を
豊前小倉の城と移し御加増行
て十五万石を領す

同十一年八月八日従四位下に叙す

同年

将軍家御入洛御発輦の時忠政騎
馬にて扈従す

大權現御発輦のとき洛中を行列
のうち松平和泉守忠吉の
秀政に御左のさきを
正月元旦御謁初の時和泉守忠吉の

座とよ悦し秀吉公の座とハ
丙寅の年九月二條の御城へ
行幸の時
将軍家御むかとして御参内の行
列の時和泉守なるなりびよ忠政御ハ
のちさきをうちハ松平山城守同兎淳ち
ハ御ハ太のさきをうつうの外御
遠祖の座配当秀吉時の例のご
と

同十四年の春伏見の御城ハ焼
くの時勝地とそなりたまひ
東照大権現の霊廟をきつきたまふ
忠政是を奉行す四月朔日霊鷲
なりび乗くを宣ふ年ぐろ世
こがりく豪勝とす
将軍家をふぐ感悦したまふ
同年十月肥前国鳴尾なりびよ
肥後国天草のくろんん蜂起し

四郎童とゝ[illegible]すうの軍
三四百人ゑ馬数原の四城をもらく
てたてごりのうしまきて[illegible]
ハゑる鴻原ハ松倉伊豆守ゑ不須
たりゆへ松倉内膳正重正石見十郎
奥清上使としてさしむけらるの
時ゑつる是よりさきゑ又鍋島信濃ち
勝茂ち沢ち庫地ゑ堅るゑ命じてう
たしむ天草ハち沢ち不須たりゆへ
他ゑ赴くさくよりゑる会義頼ち花
ち迫相陸鍋島がちとく原の城をこむ
代時よりちくゑ忠政ゑ行出馬
をたまりて十一月十四日ゑ至て
小倉ゑ向うのち松平伊豆ち伊織
戸田左門氏鉄使節として鴻原ゑ
むかゑ聖ち正月朔日洗撃をすめ
て城をせむるの時重正ち死す
同月四日伊豆ち左門鴻原ゑ至庫す

十五日宮城越おちる石川孫右衛門討死
るとなく御書と鴻原よりも
さうして法華寺中まつゆく
忠政と為野日向守人ハ奉書を
たまゆ其数ハ　七度出羽五郎馬の
田城より引籠細川越中守松平右衛門
鍋嶋信濃守ハ会津頭を義弘淳
ハ人をとして是をせむるし忠政并
為野日向守小笠原信濃守松平丹後守

ハ馬を淳ハ信ハうしろぐなくたるし
又後地より数向の軍ハ淳の
ゆうバ忠政日向守松平伊豆守両方
とおそうして家ふなするし　且又
宮木石川ガ不行の御墨印ハ諸軍
よ為ったまふとしろなりし数方と
まり忠政日向守会報とうろ後よ
ときうの所ハ上使伊豆守方ハ
淳して諸事を下知するきなりとく

是よりも忠政ゆいつり小倉より京の城よ
おりしく騎兵四百七十余歩卒七千余
とりかこむ毎日先陣ハ小倉より發
し二月朔日二陣二日ハ本陣なりしよ
うろうなへおひくひく陣ゆりも繰く
九日ふみ馬よりうり後陣ゆり乗ゆ
きのしまとうくらけたまりるゆへ
御城よりのぐこて山ゆ陣とゆ一日の
和歌ひうゆふ塚ゆ出くしまとう

とゆへども忠政ゆ陣ハかとをさゆへ
歌ゆをきゆ七日鴻巣ゆ出ゆよ
ゆ乃く城中ゆ忠政ゆ作る歌ゆ
たどをしひくひくたちゆ
二の丸の歌殿をして本丸ゆ
すりゆ作いくゆ塚のおゆ丸ゆ寄時
歌こ世とゆ乃ぐ出くくさをくれ
たひ出丸ゆ世ゆ忠政ゆ沢おも
よけめハ後陣ゆ行とゆへども先ゆ

まきたてくちやくなる城廻りの木戸口に
にせめ入一番よりとたつ大鐘とりよ
八是なる利諸軍勝数百はかりの小竹
日中より数信よりおりぶやく歌と戦
とやしゆ死もろもの疵とかりもも
おかりよりもも稲麻竹葦のごとくふや
ごうよかさなりしと忠政乃くさとして
いく歌も城より出さあい味方働
とかりつずして たりくり又ハ歌り

おしかぶりまくうをとうちもすり
ちり出とくりけりげく陣とちんよ
ここの時たまくく伊豆ちるふりくくろ
伊豆ちるがりとこころも忠政がちろよか
ちひろれバすかりち忠政が出と諸軍
れうしろより引けげく陣ふ後とり
出くれども歌ひうをくつぬるよりの
たりずして廿八日の和泉城没落
同年三月太田備中ち資家　命と

うけたまりて小倉よりおもむく忠政并
伊豆守殿門と申のつじめおりて
四月五日細川越中守鴻池清右衛門
高麗帰化馬玄蕃頭殿乗馬甚
子殿通相望申る清右衛門相手丹後屋
四郎兵衛殿同道市正殿長庫以相会
申るとき○こさ申つゝ甚家老も又
おのく同相すん所日ゐる八老年よ
りしゝ病申るよりきゝ〻ず伺中ち

撒命とのべく法ねよ法げくいて
と度天草吉利支丹一揆蜂起のす
古屋長庫頭が日来不法度のゆへ
天草とめ申げる唐津八くのゝ
くたまりる屋敷鴻原八長門守ゆ
だん少〻と度の騒動こゝ迄ゝりおこれ
里海ゝゝ小西ゝ子のゝりゝすおち
不紙を没収せりゝのるおのくこの
ひまを不知屋敷しとなり

忠紹

毋上小同し　浜五位下　主殿寮

寛永九年

初軍家の命より豊後國木付にて

四万石を領す

同十四年島原の西流蜂起の時

仰をうけたまりて島原の城に番

を勤む

忠根

民部

寛永七年十一月十五日はじめて

初軍家に謁する時に七歳

忠敦

出羽守

寛永十二年十一月廿八日初て

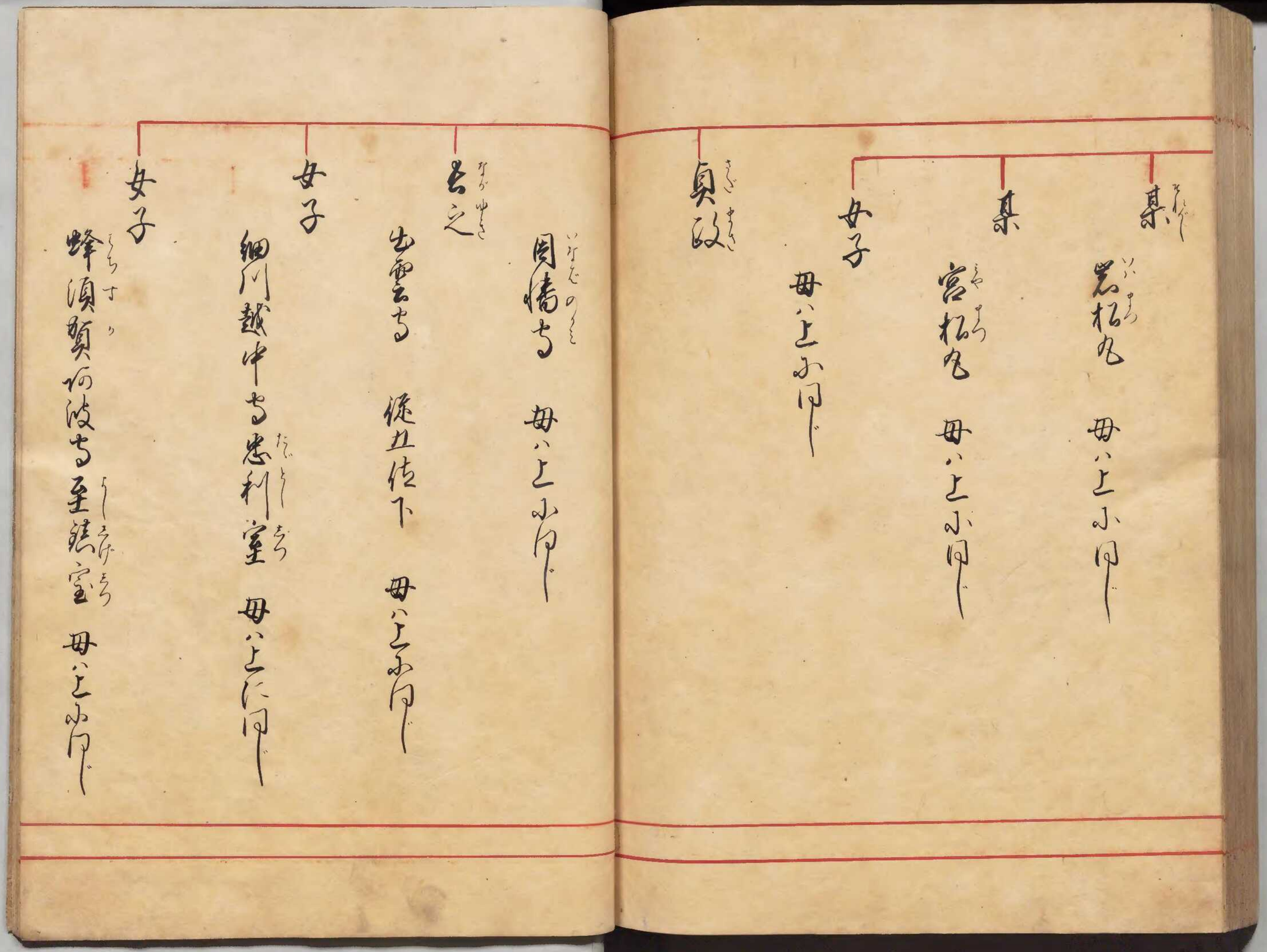
初軍家にまみえする時に九歳

重吉

母ハ上に同　法五位下　丹後守
松平丹後守重政自吉と屬なし
て子とする少へよ松平と称號す
寛永三年摂列二回まく三百石
と給す
同九年
将軍家の鈞命ありて三回を行ふ
其後國高四万三百七十石を為

須す

吉次
市正　母ハ重政女
女子
母ハ上小同
重吉
治理大夫　母ハ上小同


某
某
女子
貞政
某松丸　母ハ上ノ同
宮松丸　母ハ上ノ同
母ハ上ノ同
同清丸　母ハ上ノ同
名之
出雲丸　従五位下　母ハ上ノ同
女子
細川越中丸　忠利室　母ハ上ノ同
女子
蜂須賀阿波丸　至孝室　母ハ上ノ同

長安

嫡男　母は美濃守忠政女

元和四年十月十五日播磨姫路の城にて

誕生　童名千松　年十歳

寛永十五年十二月晦日　元服

将軍家の御命により従五位下に叙し

侍従大膳大夫に任ず

某

大和守　次男　母は上小同し

寛永八年二月廿九日播磨姫路の城にて

誕生

女子

母は上小同

女子

母は上小同

女子

母八上小おち

長次

嫡男　母八女多美濃守忠政女

元和元年五月廿五日信濃國松ちの城

ふく誕生　童名　業松丸

寛永六年九月十五日武州江戸ふく

元服

同年十月十五日従五位下小叙し信濃守

小侍従

同三年播州竜野城ふく六万石を

たまわる

同九年

将軍家の御命ふく竜野をのぞき

て豊前の中津の城ふく二万石乃

御加増あり八万石を領す

同十五年正月十五日　仰をうけたまわる

馬上二百五十余騎歩卒五千余人を
引ぬく肥前の国をおしまくに二月
二日中津と出て八日ゆくよりゆくに
長庫頭がうしろ備となる廿七日鵜島
信濃守先をとるとて京の城二ゆくに
時長次古幸をしかけくるをんで本城
大手ひくおさえ時よし使者
伊豆守戸田右つなびか検使のかく
り来たりく使者をたのりて申げく

女子

毋上ふ同
蜂須賀阿波守忠英室

いくさ長次はずめうろ備となりすん
なるか軍長をひきぐるしく出るも
長次をを城下まりて敵長の出るを
ざるを見さりて出ぐるく引て
後陣引ぬる

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan